

## 第 6 回 東南アジア分科会 議事録

開催日時： 2007 年 10 月 19 日(金) 15:30~17:00

場 所： 文部科学省 三菱ビル M6 会議室

出席者(敬称略)： 上野、石澤、片桐、友田、宮崎(分科会委員)、勝平、樋口、石田(文化庁)、齊藤、守山(外務省)、和田、内田(国際交流基金)、井上(奈良文化財研究所)、二神(東京文化財研究所)、清水、青木、豊島、田代 (コンソーシアム事務局)

### ■ タンロン皇城遺跡の保存に関わる協力 [事務局]

#### 報告の概要

- タンロン皇城遺跡保存に関わるミッションとして、7 月に支援計画に関わる意見調整のため派遣を実施した。また 8 月には専門家として上野、清水、稲葉が UNESCO ミッションに参加した。
- 7 月の派遣では、日越合同専門委員会が作成したタンロン皇城遺跡の保護に関わる日本ユネスコ信託基金活動計画(案)について、事前にハノイ古城・コア遺跡センターや考古学院、ユネスコハノイ事務所、ユネスコ国内委員会、ハノイ市人民委員会等へ事前説明を行い、意見交換を行った。その結果、これらの内容についておおむね合意を得られた。
- 上記会議において、ベトナム側は ①18 番遺跡だけでなく、周囲 1km 四方を保存対象とする方向で考える ②李王朝時代の地下遺構だけでなく、フランス統治時代の建造物やベトナム戦争時代の司令部跡など、ベトナムを象徴する幅広い時代の遺産が重層的に存在する場として保存計画を進める、③遺跡管理についてはコア遺跡センターが全面的に責任を負う という方針を打ち出した。
- 現状では、現在発掘作業を行っているベトナム考古学院とコア遺跡センターとの間での情報連携があまりとれていない模様。
- 8 月の UNESCO ミッションについては、ベトナム側から、これまでのタンロン皇城に関する調査研究成果の説明が行われた。かなりベトナム側の意識も高まってきたように見受けられた。ミッションにはフランス極東学院のメンバーもオブザーバーとして参加。日本としては極東学院の持つ過去の資料も今後の調査で参照したいと考えている。
- 重要な点としては、既に発掘してしまった所をどのように緊急保存するかという点や、これから発掘しようとするところについて古地図などでその様子を明らかにし、事前に行政措置を施すこと等があげられる。
- 現在は、UNESCO バンコク事務所のスタッフが UNESCO としてベトナム政府、日本政府に対するプロポーザルをまとめているところであり、それが受理されれば、ベトナムと UNESCO の間で契約を交わし、いよいよ信託基金プロジェクトの開始となる。プロジェクトの開始予定時期が押してきているが、今年度前倒しで行うべきものについては、引き続き二国間協力事業の枠組みで先行派遣を行っていきたい。

・現在、日越合同専門委員会の活動計画と、UNESCO 信託基金の計画が乖離して動いているような印象を受けるが、これら二つはどのような位置づけにあるのか。このまま、信託基金による事業の開始が遅れるようなことがあれば、日越合同専門委員の活動が止まってしまうのではないか。

→ 信託基金の事業は日越合同専門委員の活動を継承していると認識している。しかしながら、草の根文化無償資金協力による機材供与などの関係で、先行実施の二国間援助の枠組みは建築・考古班の活動が中心とならざるを得ない。このことが歴史班等からみれば焦りにつながってしまうのかもしれないが、現時点では予算上やむを得ない。

・現在、UNESCO バンコク事務所にて、プロポーザルの 0 次案を作成して、専門家であるみなさんの意見を伺っているところだ。これを早く UNESCO 側に返していただければ、後続のプロセスはできる限り早く対処できるよう努力する。関係各位の協力をお願いしたい。

- ・UNESCO 側は、日本の他資金による活動について情報を得たいようだ。
  - UNESCO 側は、単にここまでの日本の活動内容を知りたいだけなのではないか。他の先生方の科研資金などによる活動がプロポーザル作成に当たって障害となることはないだろう。
- ・草の根文化無償資金協力による機材供与は 11 月と聞いている。その場合、次の 2 国間援助枠による派遣は 11 月になるのか？
  - 現在、各班の班長に対して、信託基金事業開始前までにやっておかなければいけない調査等のヒアリングを行っている。全班の希望を受け入れることはできないので、それぞれの希望の中から予算とのかねあいを見て調整を行っていく予定だ。
- ・資料 2-2 にある「日越研究会の実施」というのはどのようなようになっているのか。
  - ベトナムのファン・フィー・レー先生からリクエストを頂戴したが、時期的に緊急であり、予算上大勢の専門家が参加することが難しい等の理由から、信託基金事業開始後、日本人専門家がまとまってベトナムを訪問できるような時期に開催した方がいいのではないかと提案した。
- ・ベトナムは、2010 年の世界遺産登録を目指しているとすれば、来年 2 月には推薦書を世界遺産センターに提出しなければならない。彼らは来年 2 月提出できるような準備を進めているのか。
  - その後の動きについては、情報を入手していない。
- ・ベトナム側へ、日本からの具体的な協力内容をどのような形で伝えるのか。日本の支援内容は容易にベトナム側に伝えることができるのか。
  - 支援計画の大枠については、大使館経由でベトナム政府に伝えることができるが、詳細内容については専門的な内容であることから、各班の班長同士でやりとりをする方がいいのではないかと提案した。
- ・今後とも、しばらくは二国間援助での事業実施が必要だろう。引き続き、文化庁、外務省、国際交流基金等で情報共有をしながら、皆さんのプロジェクトを支えていく予定だ。信託基金事業については、見通しがたったらすぐにお知らせする。

## ■ プランバナ遺跡群被害状況調査について [事務局]

### 報告の概要

- 6 月に保存修復計画策定に関する専門家会議が現地にて開催され、日本からも 3 名の専門家派遣を行った。海外からの参加は日本のみであり、当初予想されたイタリア人専門家との修復方針調整作業等は行われなかった。インドネシアからはガジャ・マダ大学の専門家などが参加した。この会議で、日本側の協力は原則として本年度一杯であり、成果物として保存修復計画の作成および作成に関する技術移転を考えている旨インドネシア側に伝え、合意を得た。
- 地盤調査に関しては、ガジャ・マダ大学が同様のデータ収集/調査を行っている。6 月の専門家会議の際にガジャ・マダ大学と意見交換を行っているが、各種データの解釈に差異がみられた。
- 10 月 20 日より第 3 次ミッションを派遣する。保存修復計画策定のための現地調査が目的で、①修復計画策定のための調査、②地震被害解析のための建築構造調査、③修復履歴調査、④足場建設指導などを予定している。ただし、足場建設に関しては日本からの技術協力を予定していたが、インドネシア側が必要なしと判断してきたため、インドネシア側の作業に任せることとなった。最終的な実施可否に関しては現地にて組み立て状況を見ながら判断する。
- 現地では、22 日までに足場が組み上がっているはずであり、部分解体が行われるとすれば、22 日から開始されるのではないかと推測されるが、インドネシア側が先週末ラマダン明けの休暇に入っているため、詳細な情報は入手できていない。

・日本は具体的な修理作業にも関わろうとしているのか。

→ インドネシア側は、全祠堂の中の優先順位付けや、修理実施中の観光客の動線配置まで考えている。一番重要で難しいと予想されるシバ祠堂に関しては、後回しにしているようだ。しかし、そもそも事業費の問題もあり、インドネシア国内全体で見した場合の地震復興計画の中で、文化財であるプランバナンの遺跡群の修復事業の優先順位は、どうしても相対的に下がってしまう。場合によっては、今回策定支援しようとしている修理計画も俎上にすらのってこないかもしれない。

・プランバナンの遺跡については検討する必要はないのか。

→ インドネシア政府からは、近隣にあるセウ寺院への協力も打診されているが、やはり予算の問題で手を出すことができない。

## ■ その他

・次回会議は12月20日(木) 15:30~17:00、東京文化財研究所にて開催予定。

議題としては、柴山先生のハノイ・プロジェクト報告に関するレポートを予定。

以上